THE GRANPHONIC CONCERT 12th

グランフォニック 第12回定期演奏会
2014年5月18日(日)
愛知県芸術劇場コンサートホール

ごあいさつ

本日は、グランフォニック第１２回定期演奏会に多数の方々にお越しいただき、まことにありがとうございます。

昭和の歌をふんだんに織り交ぜた前回の「エリーの青春」は、同時代を生きてこられた皆さまの心に熱いものを感じていただいたことと思います。あれから１年半を経て、今回は《愛と祈り》をテーマに、Ｎｅｔ社会に生きる私たちの、ともすると忘れがちな心の原点を呼び戻すことを目指して本日を迎えました。

まずは、成田正人の指揮によるブラームス作曲「運命の歌」。混声合唱と管弦楽のために書かれた作品を、故・北村協一先生が男声合唱とピアノのために編曲したものです。絶望の淵に堕ちて行く苦悩をテーマに据えながら、美しいピアノの旋律に合わせて「祈りと救い」を奏でます。

源田俊一郎編曲による「ふるさとの四季」は、子供の頃から慣れ親しんだ唱歌のメドレーを、小嶋聡の指揮で演奏します。それぞれの歌から目の前に浮かびあがる情景や風景が、私たちの心の中に大切なものを呼び起こしてくれます。

第三ステージは、今から69年前の東京大空襲で母親を失った宗左近が、ラテン語の歌詞とともに母親への想いを日本語で表現したものです。グランフォニックがこれまで取り上げた中でも、最も難しい曲のひとつです。指揮者向川原慎一とともに果敢に挑戦します。

最終ステージは、指揮者成田正人が手掛けたオリジナルの音楽物語です。“なりた　まさと”の数々のオリジナル作品は、グランフォニックのスタイルとしてすっかり定着しております。「新・パパの子守歌」の題名が示すとおり、1998年1月の第一回定期演奏会の「パパの子守歌」を、ＩＴ社会に生きる今日現在の時代背景に置き換えた発展ヴァージョンです。どのような展開になるか、お楽しみください。

今回も、堀口文成先生の演出を得て、更にパワーアップしたグランフォニックの世界をお届けします。

いよいよ幕開けとなります。最後までお楽しみください。

グランフォニック　団長　細江太喜雄

PROGRAM

Stage 1

男声合唱とピアノのための「運命の歌」（Schicksalslied）

作曲：Johannes Brahms
編曲：北村 協一
指揮：成田 正人
ピアノ：丸山 晶子

Stage 2

男声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」

故郷（ふるさと）～春の小川～朧月夜（おぼろづきよ）
～鯉のぼり～茶摘（ちゃつみ）～夏は来ぬ
～われは海の子～村祭～紅葉（もみじ）
～冬景色～雪～故郷

編曲：源田 俊一郎
指揮：小嶋 聡
ピアノ：早瀬 洋子
挿絵：堀口 文成

Stage 3

男声合唱とピアノのための
ミサ曲第４番「炎上」

Kyrie　曼珠沙華

現(うつつ)よ　明るい私の營(はか)よ
曼珠沙華　八十八万本
狂い咲きした　夜でした

Dies iræ　炎上

炙(あぶ)られて　火　炙られなくて　火
目をあけて　火　目を閉じて　火
夜が真昼　鳴き声たちの火の飛沫(しぶき)
空燃える　地より天への　大瀑布
火が笑っていた　だから　おれも笑っていた

Lacrimosa　淡雪

大空襲　美しさとは人を光にすることでした
淡雪を呼び入れてきての　花吹雪

Agnus Dei　母よ

終(しま)いには母さんとのみ　大書せり
胸一杯の　我が手紙かな

作詩：宗 左近
作曲：荻久保 和明
指揮：向川原 慎一
ピアノ：早瀬 洋子

……休　憩……

Stage 4

音楽物語
「新・パパの子守歌」
～いのち…受け継がれゆくもの～

プロローグ	たびだち
その1	電話
その2	パパの子守歌
その3	覚えているかい？
その4	ぬくもりを
その5	何なんだ
その6	無言歌～いのり
その7	愛に包まれて
エピローグ	見たい！

作：なりた まさと
指揮：成田 正人
ピアノ：早瀬 洋子

弦楽四重奏：ハル・カルテット
Vl. 小森 絹子　Vl. 臼田 妙
Vla. 小林 伊津子　Vlc. 酒井 直

男：小嶋 聡
男の妻：加藤 恵利子
娘かえで（声）：成井 咲喜子
息子つばさ（顔）：小嶋 絃(ゆづる)
男の分身：グランフォニック
写真撮影：根木 和彦

総合演出：堀口 文成
照　　明：古川 靖
音　　響：吉田 友和
舞台監督：礒田 有香
演出助手：渥美 優佳

ヨハネスの優しさと祈り

「だからって、建築デザイナーの責任にしないでくださいね」
先日とある建築デザイナーと話す機会がありました。
「日本の高層ビルは四角い箱ばかり。香港や上海に聳え立つビル群の多様なデザインに比べると、都市景観としての面白味に欠けるのでは？」
と水を向けると、すぐさま冒頭のような言葉が返ってきました。
彼によれば、建築工法も含め建築技術は随分進歩しており、地震国とはいえ、その気になれば、もっと斬新なデザインのビルができる。狭い日本では容積効率を重んじるのと、テナント自身があまり奇抜な形のビルに入りたがらないので、どうしてもビルオーナーが頑丈そうで無難なデザインを選んでしまうのだそうです。建築デザイナーは、そんな制約の中で、いかに個性的なデザインを追求して行くかが勝負とのこと。
「それに…」
彼は続けました。緻密な構造計算の上に立って、綿密に練られたデザインには、やはりどっしりとした安定感と機能美がある。最近のビルをよく見てくれと。
彼とこんな会話を交わすうちに、ふとヨハネス・ブラームスの音楽のことが思い浮かんできました。

***　***　***

江戸時代末期の天保4年、1833年にヨハネスは生まれました。ノーベル賞を創案したアルフレッド・ノーベルが生まれ、メンデルスゾーンの交響曲第4番がロンドンで初演された年でもあります。ヨハネスの性格は、伝記などを読むと、頑固で、一途で、理屈っぽく、でも純粋で、慈悲深い…そんなイメージが浮かび上がってきます。
「渋くて、とっつき難いのであまり…」という苦手派と、「音楽構造が綿密で論理的美しさがある」という讃美派に評価が割れ易い、まさにヨハネスの作品そのものではないでしょうか。
日本が明治となった1868年は、ヨハネスにとっても一大転機となります。その年に全曲を完成させた《ドイツ・レクイエム》が大成功を収め、苦しかった彼の生活を一変させたからです。そしてその前年に、本日演奏する《運命の歌》がひっそりと着手されているのです、

「清澄で平穏な天上界。竪琴を奏でる乙女の柔らかな指のように、爽やかな風が頬を撫でて行く。ゆりかごで眠る穢れを知らぬ嬰児の息遣いのように、そっと花開く蕾。永遠の崇高なる世界を優しく見守る、慈愛に満ちた眼差し。なんという至福の世界！なんと心やすらぐ世界…」
ゆったりとした前半部分は、このような天上界への讃美に満たされていますが、一転、激しい動きとなります。
「しかし我々人間はどうだ？静かに憩う場所もなく、日常の猥雑な汚濁の流れに身を任せるばかり。どうにもならぬ流れは奔放に自由を奪い、崖から崖へ激しくぶつかりながらすべてを磨滅して行く。決して遡ることはできず、唯ただ、もがきながら絶望とともに堕ちて行くのみ」
ヘルダーリンの手による物語『ヒュペリオン、あるいはギリシャの世捨て人』、その主人公の苦悩をうたった詩《ヒュペリオンの運命の歌》にインスピレーションを受けたヨハネスは、オーケストラと混声合唱を用いてこの作品を書き上げました。但し、この苦悩を、ヒュペリオンというギリシャの一青年のものでなく、自分たち人間の普遍的なものとして受けとめました。題名から《ヒュペリオンの》を取り去り、底無しの絶望感で閉じられた詩の後に、救済の音楽を付け加えたのです。我々は、本来楽器だけで奏でられるこの“祈りと救い”を、ヴォーカリーゼを添えて表現します。
「川床に打ち捨てられた我が身。いや、しかし、木漏れ日の柔らかな光の中で気付いたのだ。天上界の幸福な世界は、我々人間界の日常の中にも、確かに存在するものであることを。我々が気付くのを静かに待っていることを」

ブラームスはお好き？——もちろん！ちょっと気難しいけれど、心優しい彼の作品は大好きです。

(Masato Narita)

『ふるさとの四季』を演奏するにあたって

このメドレーとの出会いは13の秋。初めて合唱を意識した曲でした。この作品がなければ、歌・合唱という音楽の世界に身を置くことはまずなかったでしょう。都内の学校に通っていた私は、近くの田や畑でメダカやザリガニ、オタマジャクシ、タニシを取って帰ったり、大きい葉の下の里芋を勝手に掘り起こして土まみれになって遊んでいた幼稚園、小学校時代が忘れられずにいました。そんな時、「歌を歌ってみない?」と先生や上級生に誘われ、流れてきた曲がこの『ふるさとの四季』でした。日本人の心を表す一つ一つの曲や歌のハーモニーはもちろん、何より魅せられたのが、メドレーとして形をなすためのピアノ。いつかはあのピアノを、そして、いつかは棒を・・・

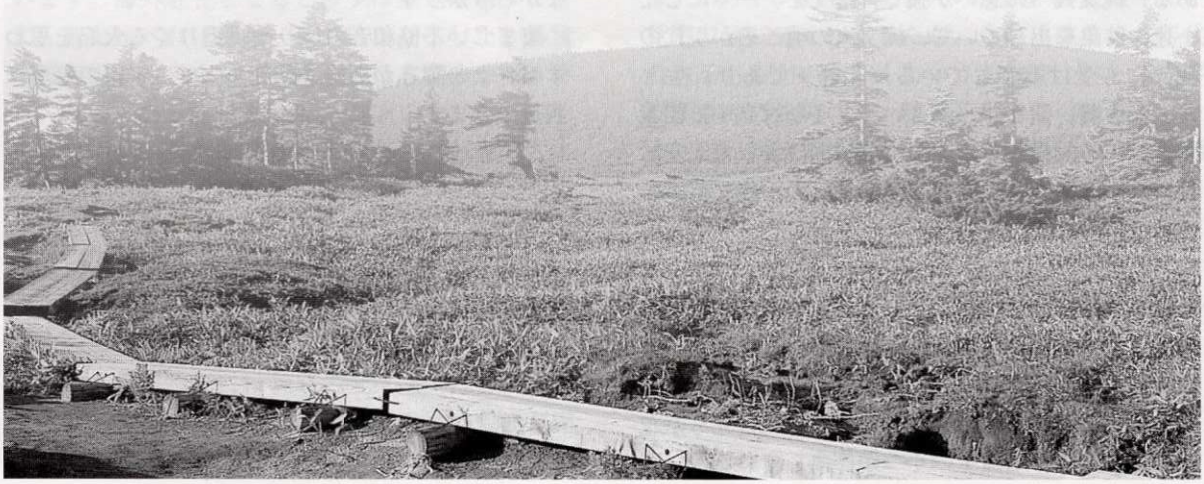
そんな想いを抱いていた若かりし頃の、自分の原点を振り返るきっかけを、今回与えていただいたことに本当に感謝しています。

源田先生の手によって1986年に生まれた『ふるさとの四季』は、今や日本全国で愛され歌われており、合唱を歌っている人で知らない人は殆どいないのではないでしょうか。海外ではなんとカーネギーホールでも歌われております。忘れかけた日本の美しい風景、豊かな情緒を、四季の歌を通し色彩豊かに歌い上げる作品です。

この作品が作られる際に源田先生が参考にされた本があるのはご存知でしょうか。それは、安野光雄さんが描かれた『歌の絵本』(講談社)です。安野さんの描く優しく心温まる絵と、源田先生の柔和で温厚なお人柄があって生まれたメドレーと言えるでしょう。

また11曲の歌それぞれにイメージや想い出があると思います。戦中戦後の混乱期、高度経済成長の激動の中もがき生き抜いてきたからこそ、唱歌に乗せられる想いがたくさんあります。メンバーの中には、戦中を北京で過ごし、日本への郷愁を掻き立てられたのが唱歌だった、という方もおります。一人一人の、一つ一つの想いが曲に彩りをつけ、男声ならではの安らぎと感動をもった唱歌メドレーを皆様にお届けできたらと思います。ぜひご期待ください。

(小嶋　聡)



レクイエム…死を悼むとは

死というものは残された人々にとって、一般的に「悲嘆」であり「ショック」であり「神秘」でもある。人々は死者への追悼にあたって、生前の人となりや業績を称え、早すぎる死や突然の死或いは理不尽な死に対する無念の情をあらわし、又はせめて自分に何かできることはなかったかと自問してみる。

これらは一見して、亡くなった人を中心に据えて、その立場を尊重し時にはその心情を（勝手に）慮ってのことではあるが、よくよく観察してみれば、一番大事な問題は生き残った自分との関わりがどうであったかということ、そしてその死を契機としてこれからの自分の生き方がどう変わっていくのかということであろう。その視点が欠けた追悼は新聞記事の受け売りとなんら変わることがない。つまり、他者の死を悼むということは、まだ生存している自分というものを強く意識し、追憶や反省を踏まえつつこれからの自分の生き方を確認することに他ならない。

宗左近（1919-2006）はちょうど69年前の5月23日、東京大空襲で母を亡くした。炎の海を一緒に逃げる時、母の手を離し置き去りにしたことで、まるで自分が母を殺したかのような自責の念に囚われ、それがその後の創作の一つの原点となり「炎（も）える母」という詩集を発表した。本日演奏するこの「炎上」もこのテーマが背景となっている。

また弥生人に征服される以前の（日本の原住民である）縄文人への想いが強く、縄文をテーマにした一連の詩集を出していて、縄文人の魂こそが現代の我々にも受け継がれている＜和魂＞であり、生と死、光と闇、愛と悲しみというような対立する要素が、楕円の対極から次第に螺旋運動によって天空に舞い上がって宇宙の原理に到達するのが縄文芸術の性格であると述べている。

荻久保和明（1953-）は、宗左近の縄文をテキストとした、いわゆる縄文シリーズという合唱組曲を数曲作曲していて、彼の作品群の中で重要な業績となっている。昨年秋亡くなった作曲家三善晃も宗左近の詩による合唱曲をいくつか作曲しているが、荻久保和明は三善晃との違いなどをこう語っている。

「戦争を知らないのに戦争を意識した作品を書くことにコンプレックスはあるね。だから同じ宗左近の詩を扱っても三善晃のアプローチが僕にはできない。…（中略）…空襲がおさまって表へ出てみると、さっきまで話していたやつが転がって死んでいる。そういう突然の死とか不条理な死というものが実体験として僕にはない。ないが、それについて書きたい。それは大きなコンプレックス。だから「縄文」を作曲するときに、濃厚な部分とか、僕にとって露骨と感じる詩は使わないわけだ。…（中略）…僕はラテン語の典礼文に作曲するが、Requiemも使う、Gloriaも使う、Dies iræ（怒りの日）なんてのは喜んで使う。…僕の中でそういう詩に反応できるわけだけれども、絶対に書かないよ、Credo（信仰告白）は。僕には信仰の証はないから。」

このミサ曲第4番「炎上」は上記にもあるレクイエム（＝死者のためのミサ曲）のラテン語の典礼文と宗左近の詩の断片をもとにして書かれていて、ミサ曲ではあるが、まぎれもなくこれは「縄文」の周辺作品だと作曲者は言っている。

さて、この詩人と作曲者による作品であることを考えれば、この曲は、死者の安息を願うレクイエムにとどまらず、また単なる反戦歌にもとどまらず、戦争や津波や交通事故などの理不尽な死も、寿命を全うした大往生も、すべての死を包みこみながら、明日に向かう我々の生きる決意表明になるべきではなかろうか。

凄まじい不協和音の塊りや、迫りくる火焔を思わすピアノの響きが螺旋運動となって、宇宙の原理に到達できますように…。

時代は変われど、受け継がれゆくもの

小学生になったばかりの頃、伯父がユーゴスラビア（現セルビア）へプラント建設のために長期出張するとのことで、国鉄（現JR）熱田駅まで親戚たちで見送りに行きました。新幹線はまだなく、寝台列車で東京まで出て、羽田から南回りで飛行機を乗り継いで行くというものでした。待ち時間を入れると、50時間を優に超す旅程だったことでしょう。2年弱の単身赴任。伯父の家族は、今生の別れのような気持ちだったのだろうなと推察します。

自分が会社へ入って間もなく、ニューヨークへ出張となりました。随分便利になったとはいえ直行便はなく、給油のためアラスカのアンカレッジに一旦降りなければなりませんでした。ヨーロッパへ行く時はモスクワで給油休憩でした。日本から欧米へは16～17時間かかった記憶です。また、日本は保有外貨が乏しかったので、持ち出せるのは一人500ドル（当時のレートで15万円ほど）が上限の時代でした。

それがどうでしょう。ほんの四半世紀ちょっと経った今、地球は本当に狭くなりました。

航空機や高速道路網など輸送機関の利便性が格段に高まり、半日乗っていれば欧米へ直行できます。また、通信の目覚ましい発達で瞬時に世界中の情報が得られるようになりました。

かつては“水盃”もので送り出された海外出張も、今や隣町へ行くのと同じ感覚で日常化されています。海外駐在となると多少は重さが増すにせよ、昔に比べれば随分一般的になりました。外貨の持ち出しは自由になったし、日本食もかなり手に入れ易くなっています。

とはいえ、海外赴任が当事者たちにとって人生の一大事であることに変わりはありません。

この作品の主人公は、どこにでもいそうなフツーのサラリーマン。ある日海外赴任を命じられます。家族と離ればなれになるのは辛いけれど、自分の成長のためには絶好のチャンスだと、勇んで旅立って行きます。そこは携帯電話の電波が届かない地域。一女一男（かえで、つばさ）の父親である彼と、妻や子供たちを繋ぐものは、国際電話とインターネットによるやり取りのみ。それでも、プロジェクトは順調に進んでいました。そんな時、不幸にして襲ってきた困難の中で、家族に助けられながら、彼は大切なことに気づきます。

人のいのちは生まれ出た日から／
たくさんの、たくさんの愛に包まれて／
強く、豊かに、輝きを増す
人のいのちは燃え尽きる日まで／
たくさんの、たくさんの愛を注いで／
新しいいのちの夢を育てる

今回の演奏会テーマは「愛と祈り」。当初構想していた新作のストーリーや構造が付帯条件に合わないことと、内外で再演を求める声があったことから、1998年1月の第1回定期演奏会で発表し好評だった『パパの子守歌』をリメイクすることにしました。堀口先生に“現代化”のアイデアを頂戴して、実現の運びとなりました。《なりた作品》の原点ともいえるシリアスものです。

原作品は、主人公の日記を読み上げてストーリーを運ぶ“モノローグ形式”で、副題も「とあるサラリーマンの日記より」としていました。今回は主人公の妻を登場させ、芝居の要素を加えることで立体的な作りにしました。また、原作品は男声合唱とピアノによるものでしたが、今回は弦楽四重奏を加えて表現の深みを追ってみました。妻のアリアも新たに書き下ろしました。

もうひとつ時代の変化が。当時の“かえで”役は、バリトン弘瀬嘉夫さんの愛娘、紗綾ちゃんが見事に演じてくれましたが、今回は該当する年代のお子さんがいない！というわけで、ベース成井詔彦さんのお孫さん、咲喜子ちゃんの出番となりました。当団の年輪を重ねた“成長ぶり”を物語るエピソードです。

いつもながら、この小さな人間讃歌を聴いて下さる方々に、ほんの少しでも《生きるエネルギー》をお届けすることができれば幸いです。

（なりた　まさと）

PROFILE

堀口　文成 総合演出
Horiguchi Fumirari

舞台俳優としてデビューし、舞台活動の傍らTVドラマ等に出演。その後、演出家としてフリーになり、演劇・オペラ・ミュージカル等の演出を数多く手掛けてきた。最近はオペラ・ミュージカルの演出を中心に、ショートミュージカルを多数企画しており、コンサート形式の演出でもクラシックからポピュラーまで幅広く活動。また、西日本を中心に行政・企業のイベント演出も手掛けている。

このように多彩な活動の中で、これまで男声合唱の演出だけは敢えて避けてきたが、グランフォニック第10回定期演奏会にてその禁を解き、第11回、第12回と連続して総合演出に当たっている。

主な演出作品：オペラ「フィガロの結婚」「コシ・ファン・トゥッテ」「ヘンゼルとグレーテル」「カルメン」「トゥーランドット」「蝶々夫人」「魔笛」「天国と地獄」他。ミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」「ウエストサイド物語」他。イベント「瀬戸大橋落成記念フェスティバル（岡山）」「坂本龍馬誕生150年祭（高知）」「ロス・オリンピック前夜祭（ロサンゼルス）」他。

向川原　愼一 指揮
Mukaigawara Shin-ichi

早稲田大学卒業。現在グランフォニックをはじめとして、7団体の合唱指揮・指導、及び文化センターの講師を務めている。指導している団体用の編曲のみならず、特殊な編成や事情に合わせた依頼による室内楽や合唱の編曲多数。また歌曲を中心とした作曲活動を続け、2007年の奏楽堂日本歌曲コンクール作曲部門（中田喜直賞の部）では谷川俊太郎の詩「はる」に作曲した作品が最優秀賞を受ける。金子みすゞの一連の詩に取り組み、これまでに数十曲の独唱曲と女声合唱曲を作曲。その一部は２枚のＣＤ録音と楽譜にして発表している。小林研一郎氏に師事。

成田　正人 指揮
Narita Masato

グランフォニック創設メンバー。交声合唱団ミューザヴォーチェ、上海グリークラブ指揮者。木下保氏、畑中良輔氏らの薫陶を受け、指揮法を伊藤栄一氏に師事。学生時代から合唱指揮の傍ら作詞・作曲・編曲に勤しみ現在に至る。編曲モノは数知れず、シナリオ起こしから作曲まで自ら手掛ける音楽物語形式の作品も多数。代表作に『子犬のチロの物語』『絵描きと少年』『不破臼人の恋』『太郎の愛』『ハーネスで握手！』『ブチ・ハラハの謎』等々。前回の『エリーの青春』のような試みも多数。本年8月にはミューザヴォーチェで『アガーテの祈り』を発表予定。

小嶋　聡 指揮
Kojima Satoshi

千葉県出身。幼少よりピアノを始め、主に歌とヴァイオリンの伴奏を独学で学ぶ。大学進学後、慶應義塾ワグネル・ソサィエティー男声合唱団に入団。畑中良輔、大久保昭男、北村協一、綱川立彦、佐藤正浩各先生に薫陶を受ける。大学合唱の傍ら、慶應義塾中等部コーラス部を指導し、自身が中等部生のために編曲した、ミュージカル「レ・ミゼラブル」などを指揮。今でも後進の育成に努めている。また、自らオーケストラ・合唱を主宰し、演奏会で披露、好評を博す。指揮を角田鋼亮氏に師事。

加藤恵利子 ソプラノ
Katoh Eriko

名古屋音楽大学声楽学科卒業。名古屋市新進演奏家紹介コンサート優秀賞受賞。(社)日本歌曲振興会 日本歌曲コンクール声楽部門入選。これまでに創作オペラやオペレッタ『こうもり』（アデーレ）、『伯爵令嬢マリッツァ』（リーザ）、ミュージカル『シンデレラ』（メイジー王妃）等の他、宗教曲のソリストをつとめる。また徳川園や名古屋市東山荘等での日本の歌ソロコンサートにも出演。

声楽を伊藤晶子、美口啓子の両氏に師事。(社)日本歌曲振興会会員。

Blog 加藤恵利子『うた、恋ふれば・・・』を公開中。

早瀬　洋子 ピアノ
Hayase Yohko

愛知教育大学音楽科卒業、同大学院修了。在学中より、名古屋二期会、名古屋オペラ協会、名古屋市文化振興事業団、愛知県文化振興事業団、三重オペラ協会、岐阜県産業文化振興事業団、名古屋芸術大学、長久手オペラレクチャーコンサートなどで多数のオペラ、オペレッタ、ミュージカルの稽古ピアニスト、コレペティトゥーア、ピアノ公演ピアニストを務める。

伴奏ピアニストとして活動する傍ら、コーラス指導も手がける。また名古屋芸術大学では長年にわたり、オペラの授業助手を担当している。

丸山　晶子 ピアノ
Maruyama Akiko

第11回多摩フレッシュ音楽コンクール入選。YBP国際音楽コンクール2004一般の部第３位。

桐朋学園大学ピアノ科卒業演奏会、第25回読売中部新人演奏会、第11回桐朋学園同窓生によるサマーコンサート、第6回セントラル愛知交響楽団室内楽シリーズ等に出演。2008年ニューヨーク・スタインウェイホールでのソロリサイタルをはじめ、2008年、2010年に宗次ホールにてソロリサイタル開催。名古屋音楽学校講師。

ハル・カルテット

2004年結成。メンバーが春日井市および近郊に在住していることから「春日井Jの「春」の文字をとり、ハル・カルテットと命名。同じオーケストラに在籍している仲間、そして姉妹という構成ならではのバランスのとれた緻密なアンサンブルを特色とした弦楽四重奏団。

左より小森、臼田、小林、酒井

小森　絹子 1st.ヴァイオリン
Komori Kinuko

桐朋学園音楽大学演奏科卒業。同研究科修了。2005年名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団。同楽団第2ヴァイオリン首席奏者。2011年リサイタル開催。

小林　伊津子 ヴィオラ
Kobayashi Itsuko

愛知県立明和高等学校音楽科、愛知県立芸術大学器楽科卒業。大学卒業と同時に名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団。1998年、1999年リサイタル開催。

臼田　妙 2nd.ヴァイオリン
Usuda Tae

相愛大学音楽学部卒業。卒業演奏会に出演。大学卒業と同時に大阪シンフォニカー交響楽団に入団し5年間在籍。現在、名古屋、大阪のオーケストラでフリーの演奏家として活動中。

酒井　直 チェロ
Sakai Nao

大阪音楽大学卒業。東京藝術大学別科を経てドイツ国立リューベック音楽大学卒業。2003年名古屋フィルハーモニー交響楽団に入団。2013年イタリアの第1回デュオハヤシ国際コンクールでデュオの部第1位。2004年、2010年、2013年リサイタル開催。

グランフォニック

もう足かけ２０年となりました。早いものです。普通の男声合唱じゃおもしろくない、オリジナリティーあふれるステージでお客様に楽しんでもらいたい、そして音楽の素晴らしさや生きることの喜びを伝えたい、そのためにはベースとなる発声や音楽表現は常に高いレベルを保たなくてはならない、なんてかなり欲張った目標を掲げてスタートしましたが、２０年の時を経て、さてどこまでその目標に近づけたのでしょうか。今回の定期演奏会は、そんな問いかけに自ら答えを出す絶好の機会となりました。

力を入れてきたドイツ語、大切にしてきた日本の心、高めてきた発声技術と音楽表現、毎回発表し続けてきたオリジナル作品で伝える生きる喜び。どのステージも、発足以来われわれがぶれることなく継続し追及してきたグランフォニックのスピリッツが散りばめられています。若手（といっても世間一般的にはかなりのオッチャンですが・・）メンバーも加え、しっかり築いてきた基盤の上に新たな息吹を感じてもらえるよう、団員全員今日も心を込めて歌います。

毎回ご来場いただいているグラマニアの皆様も、そして今回初めてお運びいただいたグラマニア予備軍（一度味わうともうあなたは虜になってしまいます）の皆様も、あくまでステージ上ではとってもステキに見える男達と、介護の、もとい、やさしく支えてくれるいつもステキな女性達との、濃密だけど後味は爽やかな、そんな時間をお楽しみください。

THE GRANPHONIC T1

佐々木正義　三ツ松　平　鹿住　誠
伊藤　高潤　小林　武　鈴木　英孝
浅井　裕之　黒岩　実　小宮　俊英
榎本　真丈　石川　周二　高津　眞司
高橋　淳一　中川　暢

THE GRANPHONIC B1

弘瀬　嘉夫　永井　一美　神田　久嗣
細江太喜雄　伊藤　慎二　寺島　正晃
水野　邦明　芝木　昌一　天野　浩
鈴木　清次　近藤　峯生

THE GRANPHONIC T2

柴田　道昭　三ツ口勝弥　石井　清
成田　正人　森重　雅夫　間瀬　譲
新谷　岳史　飯田　公男　佐藤　正
中村　嘉夫　大浦　亮一　松浦　治徳
根木　和彦　河内　幸雄　大村　元
松永　鐘治

THE GRANPHONIC B2

井ノ口貴敏　浅井　良之　外村　俊夫
松原　成憲　村井　襄介　犬塚　弘道
小嶋　聡　鈴木　秀樹　成井　詔彦
木村　文隆　村上　信　脇田　敏和

グランフォニック 第12回定期演奏会

THE GRANPHONIC CONCERT 12th

団長	細江　太喜雄
幹事長	石井　清
財務統括	松浦　治徳
総務統括	鈴木　清次
〃	村上　信

パート総務

（Ｔ１）石川　周二
（Ｔ２）根木　和彦
（Ｂ１）水野　邦明
（Ｂ２）鈴木　秀樹

音楽スタッフ

指揮者	成田　正人
副指揮者	神田　久嗣
〃	小嶋　聡

パートリーダー

（Ｔ１）小宮　俊英
（Ｔ２）間瀬　譲
（Ｂ１）神田　久嗣（兼）
（Ｂ２）浅井　良之

名誉団員・指揮者　向川原　慎一

グランフォニックでは仲間を募集しています。

【指揮者】　向川原慎一　　成田正人　　小嶋聡
【練習日】　毎週水曜日　19：00～21：15（月1回土曜又は日曜日）
【練習会場】名古屋市音楽プラザ（金山）他
【団費】　月額3,000円

【お問い合わせ】
グランフォニック　検索
http://www.granphonic.com

THE GRANPHONIC CONCERT 12th

グランフォニック 第12回定期演奏会～愛と祈り～

Stage 1

男声合唱とピアノのための「運命の歌」(Schicksalslied)

作曲：Johannes Brahms
編曲：北村 協一
指揮：成田 正人
ピアノ：丸山 晶子

Stage 2

男声合唱のための唱歌メドレー「ふるさとの四季」

編曲：源田 俊一郎
指揮：小嶋　聡
ピアノ：早瀬 洋子

Stage 3

男声合唱とピアノのための　ミサ曲第４番「炎上」

作詩：宗　左近
作曲：荻久保 和明
指揮：向川原 慎一
ピアノ：早瀬 洋子

Stage 4

音楽物語「新・パパの子守歌」～いのち…受け継がれゆくもの～

作：なりた　まさと
指揮：成田 正人
ピアノ：早瀬 洋子
弦楽四重奏：HARU Quartet
Vl. 小森　絹子　Vl. 白田　妙
Vla. 小林伊津子　Vlc. 酒井　直
男：小嶋　聡
男の妻：加藤 恵利子
娘かえで(声)：成井 咲喜子
男の分身：グランフォニック

2014 5.18 (日)

5:30pm開演(5:00pm開場)
愛知県芸術劇場コンサートホール

指定席：2,500円　自由席：1,500円

お問い合わせ：石井　tel:090-6077-4795
THE GRANPHONIC　http://www.granphonic.com

総合演出：堀口文成
照明：古川　靖
音響：吉田 友和
舞台監督：礒田 有香
演出助手：渥美 優佳